

奄美大島・龍郷町の集落形態と水害の関係性

Relationship between village forms and flood disasters
—Case of Tatsugo Town, Amami Island—

中野夏貴* 薬袋奈美子**
Natsuki NAKANO Namiko MINAI

日本女子大学大学院紀要
家政学研究科・人間生活学研究科
第23号

奄美大島・龍郷町の集落形態と水害の関係性

Relationship between village forms and flood disasters

—Case of Tatsugo Town, Amami Island—

中野夏貴* 薬袋奈美子**

Natsuki NAKANO

Namiko MINAI

Abstract In this study, I investigate the spatial composition of Tatsugo town, and clarify the deployment plan of the village and the relationship of the flood disaster.

At the same time, it performs a flood damage record, to clarify the deployment plan of the village and the relationship of the disaster, and it is intended to be a basic knowledge about the future of flood disaster prevention in Tatsugo town.

There was a relevance to the place name and disaster.

But, by population growth, it is considered that it was also residential land into a flooded suffer location.

I found Kamimichi of vertical arrangement to the river, it was considered that it is the evacuation route from the flood prone river.

Key words: Amami Island 奄美大島, Kamimichi カミミチ, Flood disaster 水害, Tatsugo Town 龍郷町

1. はじめに

1-1. 研究の背景と目的

日本は諸外国に比べ、地震や津波、台風、洪水といった自然災害が多く発生する。近年では、東日本大震災に加え、熊本県や鳥取県での地震によって大きな被害を受けた。また、広島市における土砂災害や鬼怒川の氾濫により大きな被害を受けた平成27年9月関東・東北豪雨、北海道をはじめとして大きな被害を受けた平成28年台風10号など、全国各地で様々な災害が起きている。技術の発達によって、居住地とするには難しかった土地が開発され、宅地化が進むことで、より大きな被害に遭っている。しかし、東日本大震災では伝統的な集落形態を残し、近代的な開発がされていない集落や高台にある神社

において、津波など浸水被害が小さかったことがいわれている^{注1,2)}。

伝統的な文化が残る奄美諸島は、台風の常襲地域であり、川の氾濫や高潮など水害に悩まされてきた。2010年の記録的な豪雨により、奄美市と龍郷町において計5名の人的被害や、浸水による家屋被害を受け、集落に大きな爪痕を残している。全国各地で地震や水害など自然災害が多発する中でより安全な生活を送るために、集落の災害履歴を踏まえた配置計画を行う必要があると考えられる。本研究では、豪雨災害の被害を受けた住用町と龍郷町における集落の空間構成と水害被害を調査し、集落の配置計画と災害との関係性を明らかにすることで、今後の防災についての基礎的知見となることを目的とする。

1-2. 既往研究の検討

集落と災害の関係について、村尾修氏による研究では、世界中の自然災害に対応した空間事例が調査されており、津波・強風・台風に対応した空間事例として、「沖縄県備瀬のフクギ並木」や「香川県女

* 家政学研究科住居学専攻
Graduate School of Home Economics, Division of Housing and Architecture

** 住居学科
Department of Housing and Architecture

木島のオーテ」などが挙げられている^{注3)}。多くの事例から、それぞれの集落が地域ごとの立地に応じ、自然災害による被害を軽減させる工夫がされていることが示されている。

伝統的な集落の持続性について、小林千尋氏らは、高潮や川の氾濫など水害被害を受けてきた千葉県市原市島野地区において、低地は水田、微高地は居住部といった微地形に従った屋敷構えがされていることを明らかにしている。また、小字名が土地の生産性や危険性と関連して名付けられ、水害のリスクを減らす土地利用がされていることから、伝統的な集落における集落構造が備え持つ防災性が示されている^{注4)}。

藤谷幹氏らにより、岩手県大船渡市綾里地区小石浜集落では、東日本大震災時に過去の津波被害の教訓が生かされておらず、集落の歴史や震災の記憶を継承する必要性が提起されている^{注5)}。

奄美大島の集落について、永田隆昌氏らによる論文^{注6) 注7)}では、加計呂麻島の14集落、奄美大島では瀬戸内と宇検村の6集落を調査し、集落の空間概念を明らかにしている。現地調査によって、ノロ祭祀がなくなった現在でも、カミヤマと呼ばれる聖山、ウガン山などと呼ばれる聖地、それらをつなぎ神が通ると言われるカミミチ、広場であるミヤー、カミ祭りを行う建物のアシャゲやトネヤなどの祭祀空間が残ることが分かり、これらを結び、集落の空間を解析すると、「海岸線交差型」と「海岸線平行型」の2つに類型化できることを明らかにしている。しかし、その他の集落でも同様の空間構成が存在するのか、またそれが災害との関連で今後の集落計画における示唆があるのかという点については、十分な知見が得られていないことから、研究の余地があると考えられる。

2. 対象地域の概要

2-1. 対象地域と調査方法

対象地域は鹿児島県大島群龍郷町の秋名、幾里、嘉渡、円、龍郷、安木屋場、久場、瀬留の8集落の計10集落とした。龍郷町は、2010年に起こった奄美豪雨により、大きな被害を受けたことから対象とした。

奄美群島は、15世紀半ば頃から17世紀初頭まで、琉球国の統治下に置かれていた。そのため、琉球国で施行されていた地方行政単位である「間切り」に

より、7間切（笠利間切・古見間切・名瀬間切・住用間切・屋喜間切・東間切・西間切）区分されていた。琉球国の奄美大島統治の拠点は笠利に置かれていたと考えられる。薩摩藩による1609年の軍事侵攻の結果、奄美群島は、琉球国の統治下から事実上分離され、薩摩藩の直轄地域として支配されるようになる。薩摩藩統治時代も間切制度は引き継がれ、元禄年間(1688～1703年)には笠利間切(赤木名方・笠利方)、古見間切(古見方・瀬名方)、名瀬間切(龍郷方・名瀬方)、住用間切(住用方・須垂方)、屋喜内間切(大和浜方・宇検方)、東間切(東方・渡連方)西間切(西方・実久方)の7間切14方で構成されていた^{注8)}。

現在の龍郷町は赤木名方と瀬名方、龍郷方の3つに跨っており、琉球服属時代から明治時代まで、龍郷方の集落は廃村等がなく、龍郷町全14集落の過半を占めることから、本研究では龍郷方の7集落を対象とした。

調査方法は、文献調査とヒアリング調査を行った。文献調査では、龍郷役場と鹿児島県地方務局奄美支局にて土地台帳を閲覧し、集落内の地目の変遷について確認を行った。土地台帳とは、明治政府による地租改正後の1874(明治7)年より、地租を課するために必要な土地の情報を登録した帳簿であり、1960(昭和35)年に廃止された。

奄美大島の文化や歴史背景について、下野敏見氏の「奄美諸島の民俗文化誌」¹⁾や金久正氏の「復刻 奄美に生きる日本古代文化」²⁾、昇曙夢氏の「復刻 大奄美史(奄美諸島民俗史)」³⁾、「奄美学」刊行委員会による「奄美学 その地平と彼方」⁴⁾、松下志朗氏の「近世奄美の支配と社会」⁵⁾などの文献から整理した。

2015年から2016年にかけて、現地調査と各集落の区長や住民にヒアリング調査を行い、集落の空間構成と災害時の被害について明らかにした。

2-2. 奄美大島の概要

奄美大島の集落は、琉球王国の統治によりノロ祭祀が始まり、独自の行事が多く存在している。旧暦の8月15日に行われる十五夜相撲では、集落の平和と安全を祈願し相撲をとる。その後、豊作を祝い、神々に感謝する八月踊りが行われる。その他、6月頃に海岸にお弁当やお酒を持ち寄り遊ぶ「浜下れ」や、豊作を祝って集落の平安を感謝するとともに、

次年度の経費を集める「種下ろし」、五穀豊穡を感謝し、来年の豊作を占う「アラセツ行事」などが代表的である⁵⁾。

龍郷町誌から集落の特徴を整理すると、大勝・中勝を除く他の集落は海と接し、背後に水田や山があるので、漁村・農村の明確な区別がないとされていた。そのため、シマとシマとの間における農産物と海産物の交換は行われず、魚なども一部を除いて同じシマ内で消費され、市などはなかったとされている。

集落内の構成については、神聖なるカミヤマ、聖なる泉、シマの生活空間の中心となるミヤー(広場)、海へ通じるハマオレミチや人生の終着点である墓地郡がある。神も死霊も祖霊も人々も共存している空間がシマだとされている。龍郷町誌に記載されている小字名を整理すると、ムラは集落の中心部を指し、サトが集落の始まりとされていることがある。カッチャマタやカジヤシキは鍛冶屋敷跡を指しており、神高い土地で人がみだりに手を入れるとたたがりがあるとわれ、恐れられている。ナカミチ、ナミチは集落の中央を走る道で、広場を指すこともある。テンツやオダキ、カテリヤ、オデモリ、オガミヤマは神高い山を指している。また、ウントノチは山裾の

1段上がったところを指している。トイゴは、正月の若水取りに来る場所で、カッチャゴは泉であり、水神様を拝む人々が来る場所である。グスク(城)と呼ばれる空間は、立地的特徴から海岸に舌状に突き出た台地、集落後方の微高地、山中にあるグスクの3つに分類される^{註9)}。龍郷町で、発見できたグスクは、微高地にある山の手の集落を俯瞰できる場所となっている。

3. 空間構成の考察

3-1. 集落の成り立ち

龍郷町の主な歴史を Table 1 に示す。間切から室町時代には、赤木名方と瀬名方、龍郷方にまたがり、現在の龍郷町集落が存在していた。集落内の宅地の変遷については、明治時代以前の資料が発見できなかったため、明治時代より開始された土地台帳から、宅地の変遷を追う。

明治時代に登録されていた宅地は、秋名・幾里集落ではサトやアガレ、ウントノチに見られ、嘉渡集落ではサト、ナカガネク、シオハマ、ウシロンタなど川沿いを除いた広域に見られた。円集落では、字窪里付近やカネク、サトに宅地が見られ、龍郷集落では集落内全てにおいて宅地が点在していた。久場

Table 1 The history of Tatsugo town

時代	年号	出来事
紀元前1千年ごろの縄文後期～平安時代(8, 9世紀までを奄美世、それ以降を按司世)		城字池平の通称サモトとよばれる場所に人が居住し、生活していた。
那覇世(室町)	1440年前後	奄美大島が琉球王朝に支配され、行政区画として7間切りを設け、さらに郡に分ける。
大和世(江戸)	1609年	薩摩藩が奄美を直属領として支配する。行政区画はほぼ変わらず、元禄(1688～1703)以後、各間切は、2つの方に分けられる。
明治	1871	廃藩置県で鹿児島県が設置されたが、交通不便という理由で藩政が続く。
	1875	在藩所が廃止されて、名瀬に大島大市庁が置かれ、鹿児島県の管轄下に入った。間切はそのまま残る。
	1879	各支庁が廃止され、大島群島は大島郡として大隅国に編入された。
	1908	島嶼町村制が施行され、奄美群島では従前の23の方戸長役場区域を16村に編成する。笠利間切の赤木名方(赤尾木・芦徳)、古見間切の名瀬方(浦・大勝・中勝・戸口)、名瀬間切の龍郷方(円・龍郷・嘉渡・久場・幾里・秋名・瀬花留部・屋入)からなる龍郷町が誕生する。各村には村長1名、収入役1名が置かれ、大字には区長が置かれる。
大正	1920	島嶼町村制が廃止され、普通町村制が施行される。各村には村長、助役、収入役が置かれる。
平成	2006	笠利町・名瀬市・住用村の3市町村が合併し、奄美市が誕生する。

集落では、宇山城、時森、南作付近やアダンザキに宅地が見られ、尾ラや番屋では宅地が見られなかった。瀬留集落では、ムラやハマダ、トオヤマ、カッチャマタに宅地が見られ、川沿いやマサキ、タビラに水田が広がっていた。

1956（昭和31）年の旧版地図より、龍郷町秋名集落に108軒、幾里集落に41軒、嘉渡集落は47軒、龍郷集落に66軒、円集落に46軒、久場集落に27軒、瀬留集落に35軒の住宅が確認できた。

秋名・幾里集落では現在コミュニティーセンターや高齢者施設が配置されている場所が水田であったことが明らかになった。嘉渡集落の川沿いも水田が広がり、現在の水害との関連を感じさせる。龍郷集落や円集落では、現在の宅地との差異はあまり感じられず、川沿いは水田が広がっていた他、山裾にも水田があったことが分かる。久場集落は山裾に広がる宅地は現在と差異はなく、現在原野になっている空間に水田が広がっていた。瀬留集落は、山裾から浜に向かって宅地が作られ、川沿いから海に面して水田が広がっていた。現在、玉里と呼ばれている地区は、1977（昭和52）年から龍郷湾の埋め立て工事が行われ、発電所や県営住宅が建設されてきたが、1956（昭和31）年には海であったことが明らかである。

3-2. 地名と災害

現地調査の結果を整理すると、集落毎に現在も認識されている小字名が確認された（Table 2）。

Table 2の災害民俗地図より、秋名・幾里集落は、ワキ、ナカ、サト、マツカゼ、シオハマ、アガレ、ウントノチの7つが確認され、集落の始まりとされているのは、ウントノチと呼ばれる場所であることが聞かれた。ウントノチとは、豪農の麻福栄志の屋敷があり、屋敷の西部と南部は山に接し、東部と北部はサンゴの石垣が積まれていると龍郷町誌に記されている。奄美豪雨では、河川沿いが多く浸水被害を受けたが、高台であるウントノチには浸水被害は聞かれなかった。

嘉渡集落で、現在も使われる小字名は、ナカガネク、ウシロンタ、シオハマ、モンタ、ナマ（サト）、ナンギョ（山）、コマタ、ウバマ、ホーレである。災害の経験としては、チリ地震津波では浸水したが、死者はいなかった。奄美豪雨での被害は、166世帯中25世帯が床上浸水したことが聞かれた。川沿い

にある、元々は田んぼであったというモンタでは、奄美豪雨の浸水被害が聞かれた。

円集落は、サト、カネク、ハマガネク、ニャト、ハマングラ、ナカミチ、グスクと呼ばれる空間が存在していた。また、カミヤマの他に、ウラヤマと呼ばれる山が存在していた。浸水被害を受けた箇所は、川沿いのハマガネク付近であり、サトやカネク、ナカミチ、グスクでは浸水被害は聞かれなかった。さらに、3つの家の本家の場所が明らかになり、これらはいずれも浸水被害を受けていなかった。龍郷町誌より、フーグスクは集落を俯瞰できる山の斜面であり、オランダ人の襲来に備え、山裾の斜面にはヨコミチという逃げ道まで作られていた。

龍郷集落は、チリ地震津波による浸水はなかったが、奄美豪雨においては、床上・床下浸水の被害を受け、川に挟まれたトキワと呼ばれる地区の全世帯が避難した。しかし、ウントノチやグスクと呼ばれる場所では、浸水被害は聞かれなかった。

久場集落は、アダンザキ、尾ラ、ウントノチ、テブルと呼ばれる場所が存在した。ウントノチと呼ばれる高台の裏にある山をウラヤマと呼び、シイの実の採集などを行っていた。ウントノチに建つ家は、地震津波の避難場所とされていたが、奄美豪雨でその裏山が崩れたことが聞かれた。

瀬留集落は、ハマダ、トオヤマ、カワナカ、ムラ、マサキ、タビラ、トリヤマ、タマンダ、カッチャマタ、ターグスクと呼ばれる場所が存在する。カッチャマタと呼ばれる場所では、1960年に発生したチリ地震津波によって浸水被害を受けたが、奄美豪雨による川の氾濫でも浸水被害を受けたことが明らかになった。

以上より、集落の古くからの場所とされるウントノチやグスクでは、浸水被害がなかったことが多く、宅地化が進んでいく中で、川の氾濫などによる浸水被害を受けるような場所にも人々が住んでいったのではないかと考えられる。

3-3. 集落の空間構成について

既往研究では、集落の空間構成をオガミヤマやミャーから構成される信仰軸によって、整理していた。しかし、今回の調査ではウガン山などの聖地やトネヤ・アシャゲといった集落内の構成要素を知る住民がおらず、確認することができなかった。これより、現時点の集落状況から空間構成について考察

を行い、特にヒアリングが得られたカミミチに着目し、整理した (Table 2)。既往研究より、カミミチとは、「神の通る道」とされ、「カミヤマからミヤーを経て、浜にまで通じているのが一般の形である」としている。

現地調査よりカミミチの確認できた集落は、秋名・幾里、嘉渡、円、久場、瀬留集落であった。秋名・幾里集落のカミミチは、表2に示すように、山裾を通るもの、ノロヤシキから集落内を横断しているもの、川に垂直に通るものの3本が存在していた。山裾を通るカミミチは、ブロック塀などで囲われることも、舗装されることもなく、細い山道のように感じられる。

嘉渡集落では、オガミヤマにつながるもの、川に平行なものの2本が存在していた。円集落では、等高線に平行で山に垂直なものの4本が存在しており、そのうち1本がナカミチと呼ばれる広場空間からカミヤマの山裾につながっている。

久場集落では、ウラヤマと呼ばれている聖山へ垂直につながるものが存在しており、ミヤーのような広場機能をもつナカミチから聖山をつなぐ信仰軸を作っている。ヒアリングでは聞かれなかったが、1981 (昭和56年) に調査が行われた龍郷町誌では、オデモリが聖地とされており、現在の住民の認識との違いが確認された。

瀬留集落では、川に垂直なカミミチが2本存在し、ウトノチや聖山へのつながりは確認できなかった。また、龍郷町史において、集落の道が直線的でなく、交差した個所が多いのは、賊に襲われた時に逃げやすいためであるとされている。

以上より、カミミチと集落構成の関係は、既往研究で見られた信仰に関連した配置だけでなく、川につながる配置が見られた。また、グスクは、外敵からの襲撃を防ぐため、集落を俯瞰できる場所に配置されたが、現在でも災害時に有効である可能性が考えられた。

4. おわりに

現在は宅地化されている、川沿いやモンタ・タピラのような田を連想させる小字の残る場所、手を入るとたたりがあるとされたカジヤシキの跡地周辺などでは、奄美豪雨による浸水被害が多く聞かれた。一方で、高台であるウトノチやグスクといった場

所では、浸水被害を免れた集落が多く見られた。これより、地質・地形にあわせた小字名が定められているものの、現在の土地利用に活かされていないことが考察できた

カミミチについては、川に垂直な配置を発見し、オガミヤマとミヤーを繋ぐことに加え、氾濫しやすい川からの避難経路である仮説が考えられた。また、カミミチはブロック塀を切ったものを記録されていることが多いが、山裾に沿った舗装されていないカミミチも確認でき、災害時に山など高台へ逃げるための道ともなりえるのではないかと考察が得られた。

〔要約〕

本研究では、奄美大島の龍郷町における集落の空間構成を調査し、地域信仰との関連性を明らかにする。また同時に、水害被害の記録を行い、集落の配置計画と水害との関係性を明らかにすることで、龍郷町における今後の防災についての基礎的知見となることを目的とする。

調査より、地名と災害に関連が見られたが、宅地化が進んでいく中で、川の氾濫などによる浸水被害を受けるような場所にも人々が住んでいったことが考察される。カミミチについては、川に垂直な配置を発見し、オガミヤマとミヤーを繋ぐというカミミチの位置づけに加え、氾濫しやすい川からの避難経路ではないかと考えられた。

註記

- 注1) 中川恵子：高台にある神社の津波避難所としての有効性～東日本大震災の被害を受けた南三陸町・女川町を対象として～、日本女子大学家政学部住居学科卒業論文、2011
- 注2) 中越愛：漁村の住まいと災害に強い集落形態の研究～秋田県男鹿市戸賀加茂青砂集落を事例として～、日本女子大学家政学部住居学科卒業論文、2013
- 注3) 村尾修：災害に対応した都市・建築空間体系化に向けて、学術講演梗概集2015(都市計画)、419-420、2015
- 注4) 小林千尋、中谷礼仁、庄子幸佑、堀井隆秀：千葉県市原市島野における伝統的集落の持続性についての研究—<千年村>研究その

3一, 学術講演梗概集 2014 (建築歴史・意匠), 123-124, 2014

- 注5) 藤谷幹, 井上絹子, 大橋由実, 武 菁菁, 曾我明宏, 山本裕文, 饗庭伸, 池田浩敬, 寺澤草太: 津波被災地における教訓継承手法の開発: 大船渡市三陸町綾里地区の復興まちづくり研究 (その2), 学術講演梗概集 2014 (農村計画), 67-68, 2014
- 注6) 永田 隆昌, 高見 徹志, 松永 達, 九十九 誠: 加計呂麻島旧実久村 14 集落の空間概念 集落の空間構成に関する研究, 日本建築学会九州支部研究報告, 2001.3
- 注7) 永田 隆昌, 高見 徹志, 松永 達, 九十九 誠: 奄美大島西部地域 6 集落の空間概念 集落の空間構成に関する研究, 日本建築学会九州支部研究報告, 2002.3
- 注8) 奄美市教育委員会: 史跡赤木名城跡保存管理計画書, p.17, 2015.3

注9) 「奄美学」刊行委員会: 奄美学 その地平と彼方, p.417, 株式会社南方新社, 2005.4

参考文献

- 1) 下野敏見: 南日本の民俗文化誌 10 奄美諸島の民俗文化誌, 株式会社南方新社, 2013.12
- 2) 金久正: 復刻 奄美に生きる日本古代文化, 株式会社南方新社, 2011.6
- 3) 昇曙夢: 復刻 大奄美史, 株式会社南方新社, 1949.11
- 4) 「奄美学」刊行委員会: 奄美学 その地平と彼方, 株式会社南方新社, 2005.4
- 5) 松下志朗: 近世奄美の支配と社会, 第一書房, 1985.7
- 6) 龍郷町誌民俗編纂委員会: 龍郷町誌 民俗編, 鹿児島県大島郡龍郷町, 1988.10